

第1章 歴史的風致形成の背景

1. 自然的環境

(1) 位置

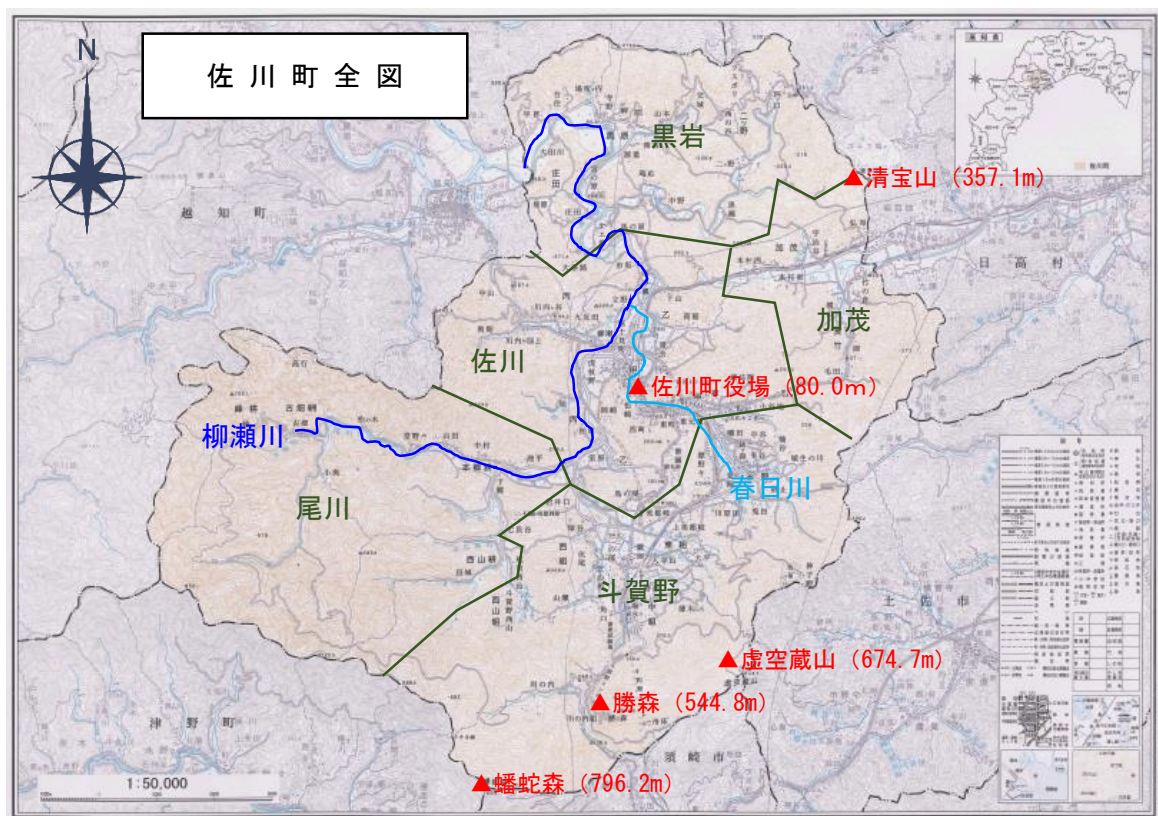
佐川町^{さかわちょう}は、高知県の中西部に位置し、県都高知市からは27km、車で1時間圏内の距離にある。東西11km、南北12kmで、総面積は101km²であり、周囲は越知町^{おちちょう}、津野町^{つのちょう}、須崎市^{すさきし}、土佐市^{とさし}、日高村^{ひだかむら}の5市町村に囲まれている。広域的に見ると高知市と愛媛県を結ぶ国道33号、山間部と太平洋を結ぶ国道494号とJR土讃線が交差する交通の結節点に位置する地域である。



(2) 地形・地質・水質

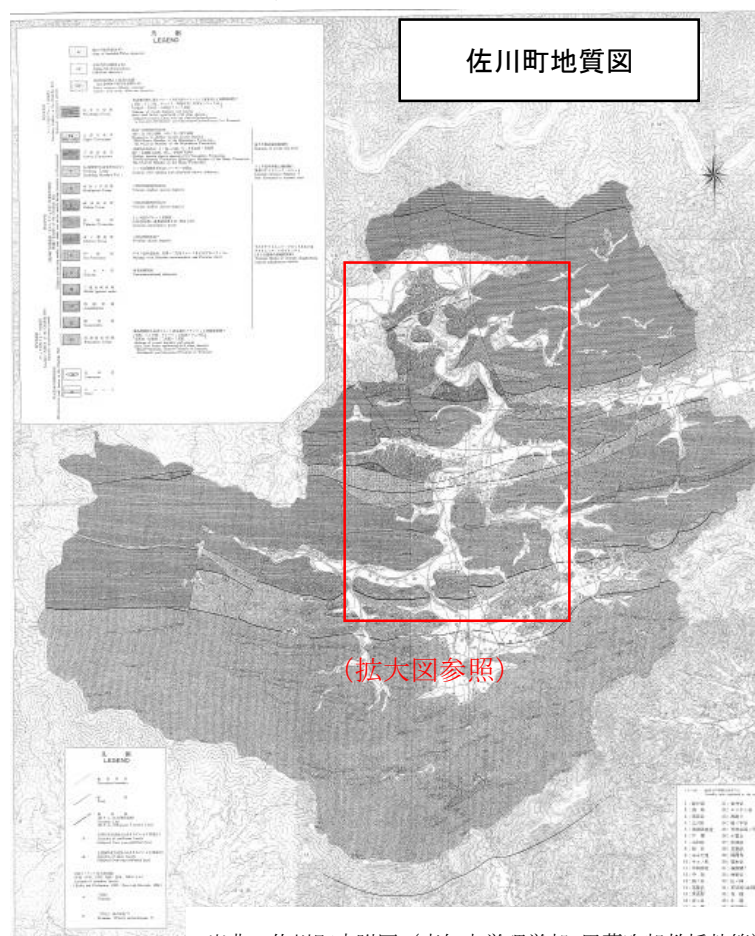
佐川町は、四国山地の支脈である虚空蔵山（674.7m）、勝森（544.8m）、蟠蛇森（769.2m）などの山に囲まれた中央盆地状の地形で、盆地内は丘陵や低山と斗賀野・永野・尾川・佐川・黒岩の各平坦地からなっている。盆地内の海拔高度は、斗賀野で約100m、佐川で約80m、黒岩で約60mである。丘陵の尾根や盆地周辺の山脚は、ほとんど東西方向に並び、その間に谷底平坦地が形成されている。また、南北方向にも、丘陵を横切る幅広い平坦地が広がっている。このように佐川には、諸外国の例に比べるとスケールは小さいが、日本では代表的な構造盆地が形成されている。

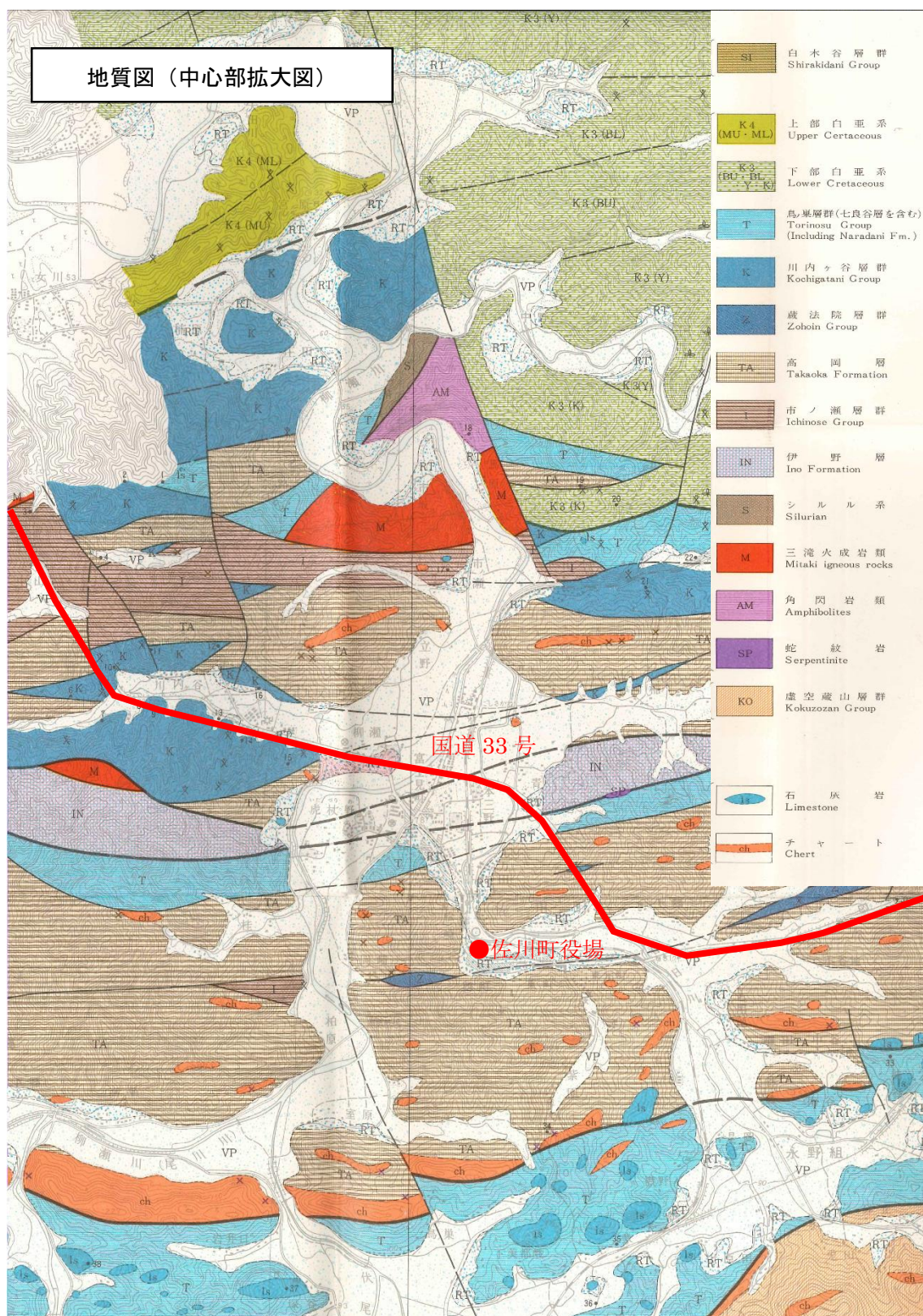
これらの間を縫って町内に源を発する柳瀬川（尾川川）などが北流している。佐川の地名は、柳瀬川の支流である春日川が南の土佐湾に直流せず、逆に北に流れる逆川（サカガワ）であることに由来するとの説もある。



また、古生代から中生代にわたっての幅広い時代の地層が、いたるところに露出し、世界的に貴重な化石が産出している。明治 16 年(1883)と 18 年(1885)の 2 回、日本地質学の創始者と言われたドイツ人地質学者エドモンド・ナウマンが佐川を訪れ、「鳥^{とり}の巣^す層群」を命名、佐川が地質学上非常に重要な地であることを初めて世界に紹介した。その結果、佐川は「地質のメッカ」として知られている。町内には鳥の巣層群に接続するカルスト台地があるが、昭和 61 年(1986)、ナウマン来町 100 年を記念して、これを「佐川・ナウマンカルスト」と名付け、町の天然記念物にも指定した。

その他にも、世界的な植物学者^{まきのとみたろう}牧野富太郎博士を育んだ風土だけに、ワカキノサクラ、サカワサイシン、サカワヤスデゴケ等特色のある植物が見られ、バラエティに富んだ自然が残っている。これは、農地やそれに連続する山裾、その境界域にあたる林縁部からなる里山のエリアで豊かな生物相が保たれていることによるものであり、また林縁部には多くの社寺林が存在しており、そのような場所も生物の生息空間として有効に機能しているからである。





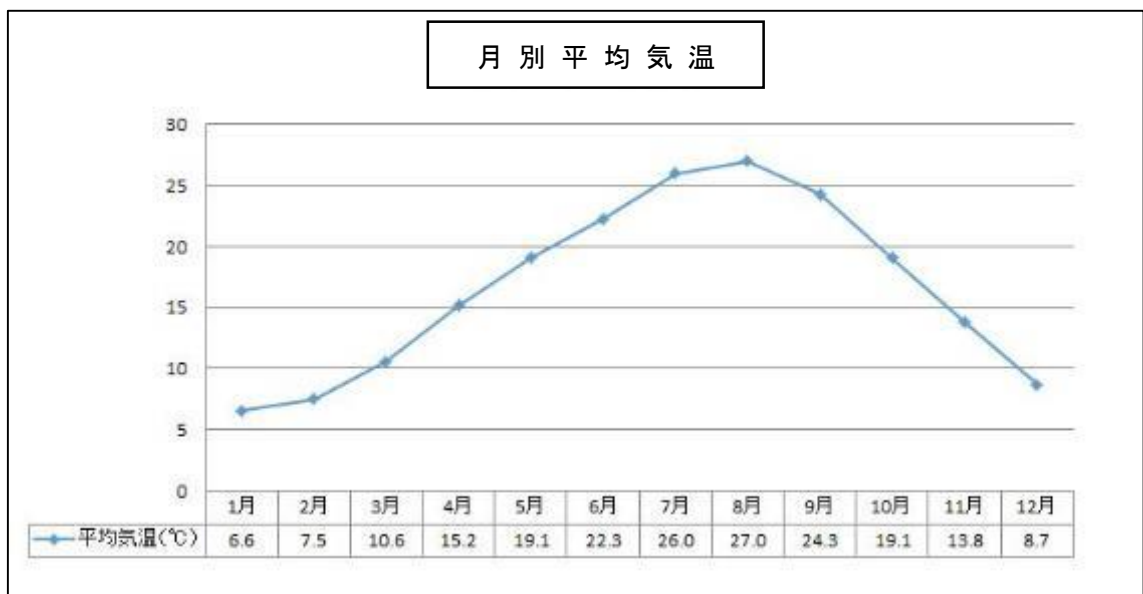
出典：佐川町史附図（高知大学理学部 甲藤次郎教授執筆）昭和 57 年発行

(3) 気象

年平均気温が約 17℃、年間降水量 2,800 mmを超える、概ね温暖多雨な気候だが、冬季はしばしば降雪も見られ、春や秋に霧^{もや}が発生することもある。



出典：気象庁 1981-2010 平年値（佐川観測所）

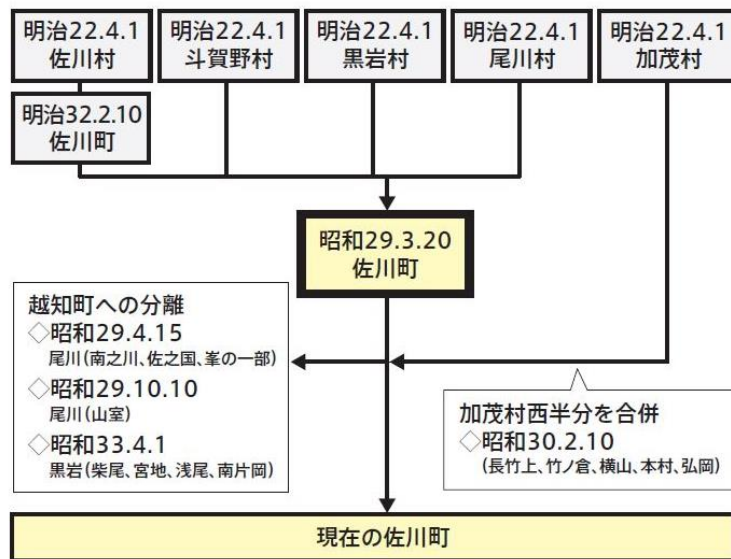


出典：気象庁 1981-2010 平年値（須崎観測所）※最寄地点

2. 社会的環境

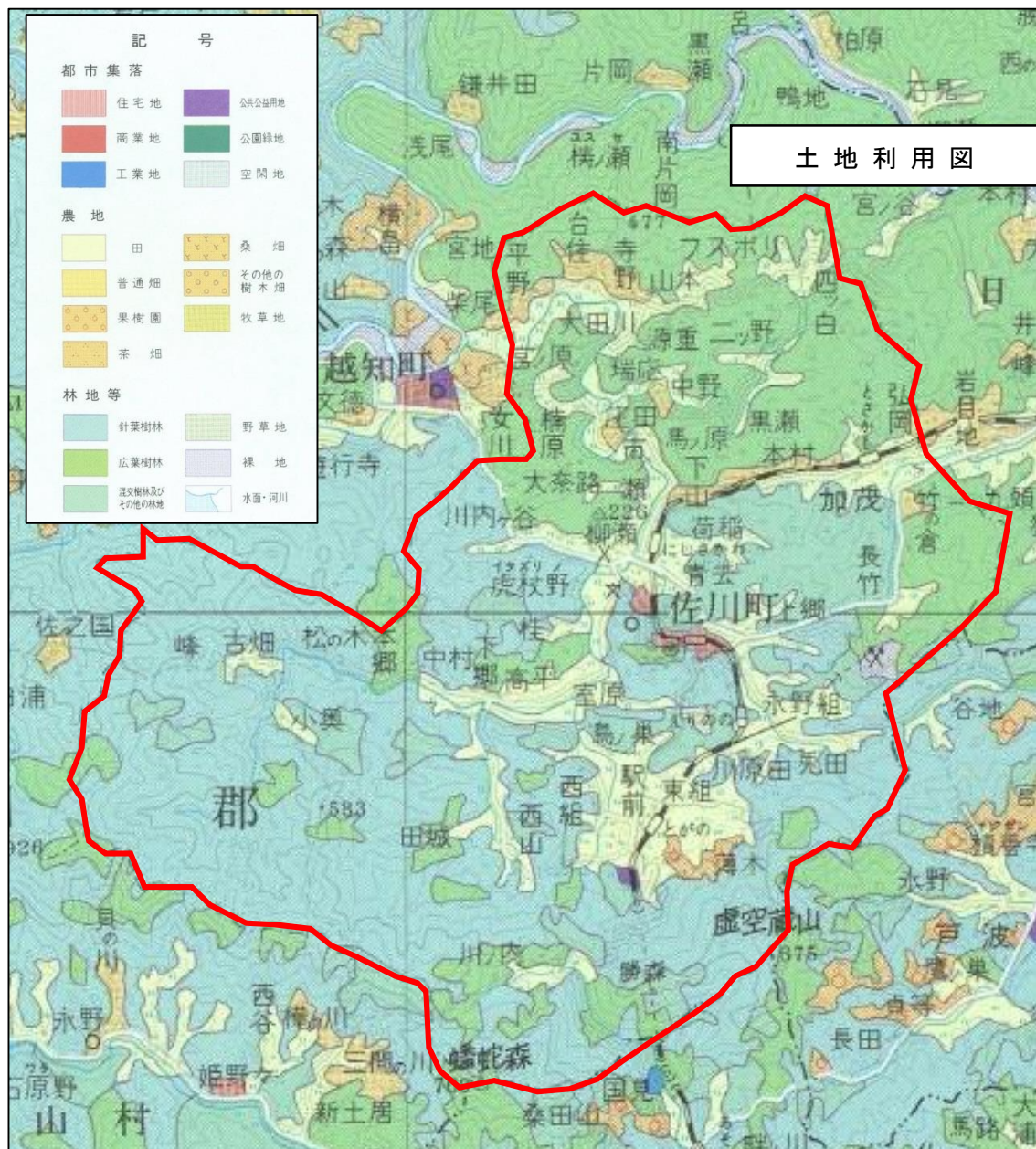
(1) 町の沿革

佐川町は、昭和28年（1953）の町村合併促進法の施行により、翌年に佐川町、斗賀野村、尾川村、黒岩村が合併し、さらに昭和30年（1955）に加茂村の一部を合併し発足した。その後、昭和33年（1958）の境界変更を経て、現在の佐川町となる。

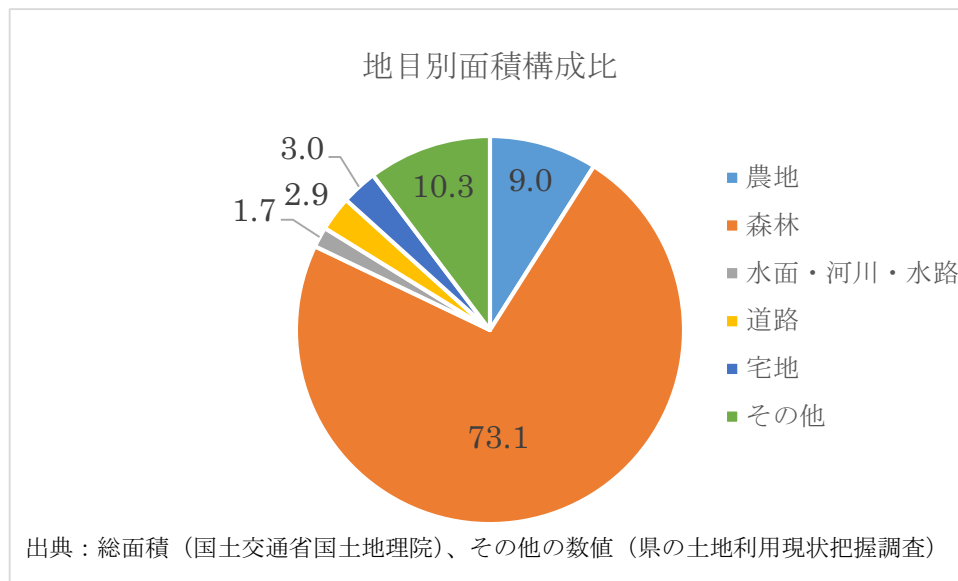


(2) 土地利用

佐川町は、地目別に見ると町全体の約 70%が森林である。山地の植生は、スギ・ヒノキの人工林がその内の 70%を占め、ついでシイ、カシ等の広葉樹やアカマツからなる天然林が 30%となっている。高知県全体の植生と比較すると佐川町は農地やアカマツ林の面積割合が高く、人々による自然環境の利用が進んでおり、いわゆる里山が多い。その他、農地 9%、道路 3%で、宅地の割合は 3%となっている。



出典：国土交通省国土地理院



（３）人口動態

総人口については、1955 年から 2015 年までの 60 年間で約 30%減となり、2018 年では 13,000 人を割り込んでいる。

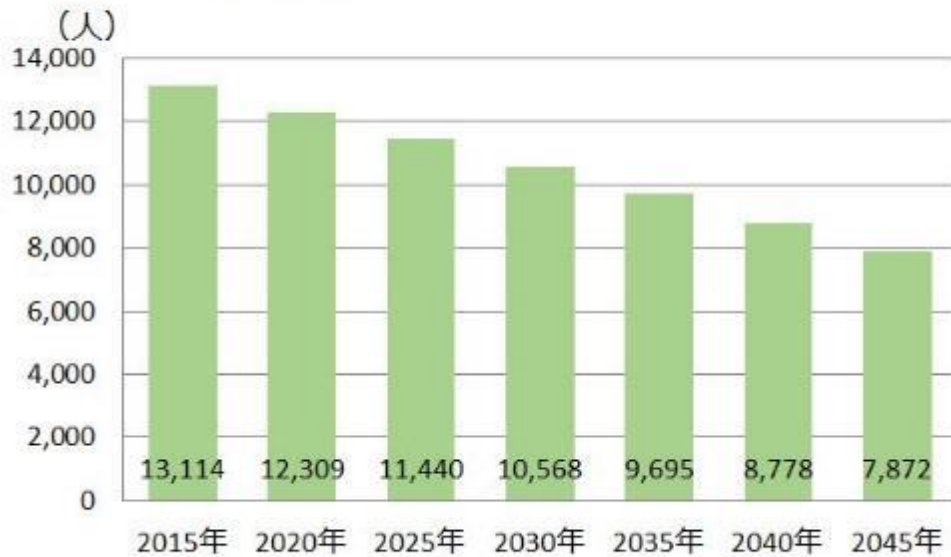
今後の人口推計においても、減少傾向は続き、2045 年までに約 5,000 人が減となり、8,000 人を切る推計値が示されている。

また、その年齢区分別では 14 歳以下、64 歳以下の割合がともに減少するのに対して、65 歳以上の割合が増加することが見込まれている。



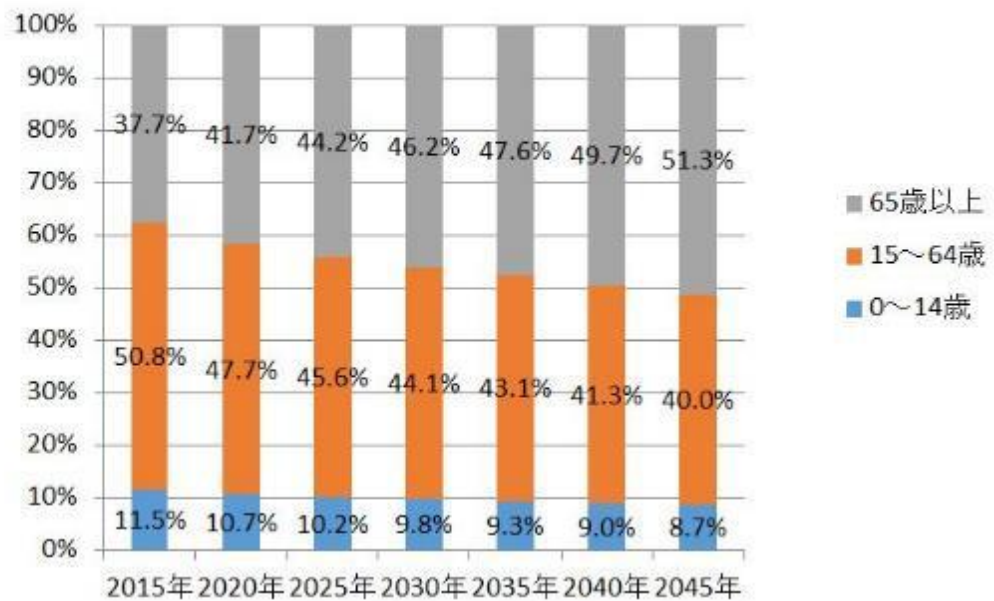
出典：平成 27 年国勢調査

総人口の将来推計（2015-2045）



出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」2018 年

年齢区分別割合の将来推計（2015-2045）

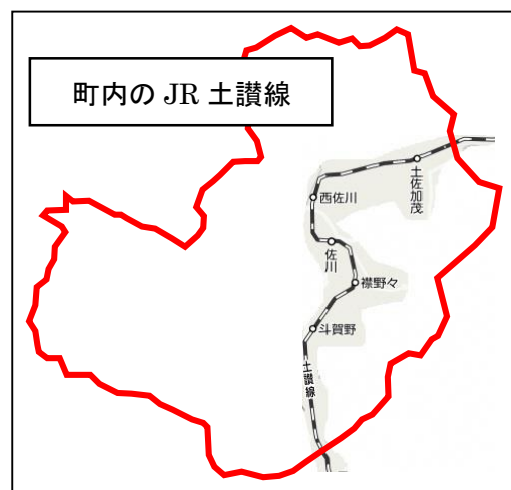
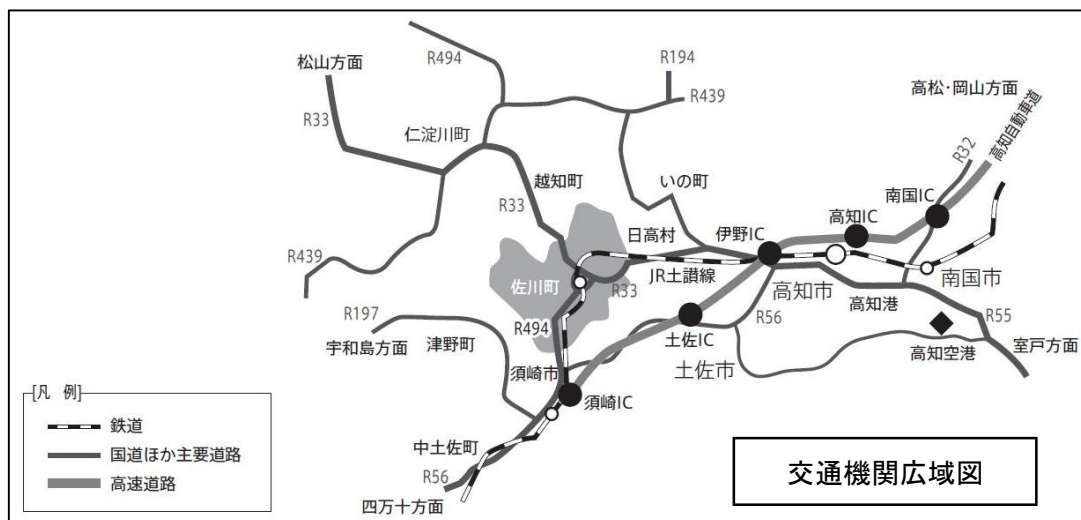


出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」2018 年

(4) 交通機関

高知県と愛媛県を結ぶ国道 33 号が東西に走り、それに交差する形で南北に JR 土讃線が走る。町内には、土佐加茂駅、西佐川駅、佐川駅、襟野々駅、斗賀野駅の 5 つの駅があり、高知市等への通勤・通学に多く利用されている。

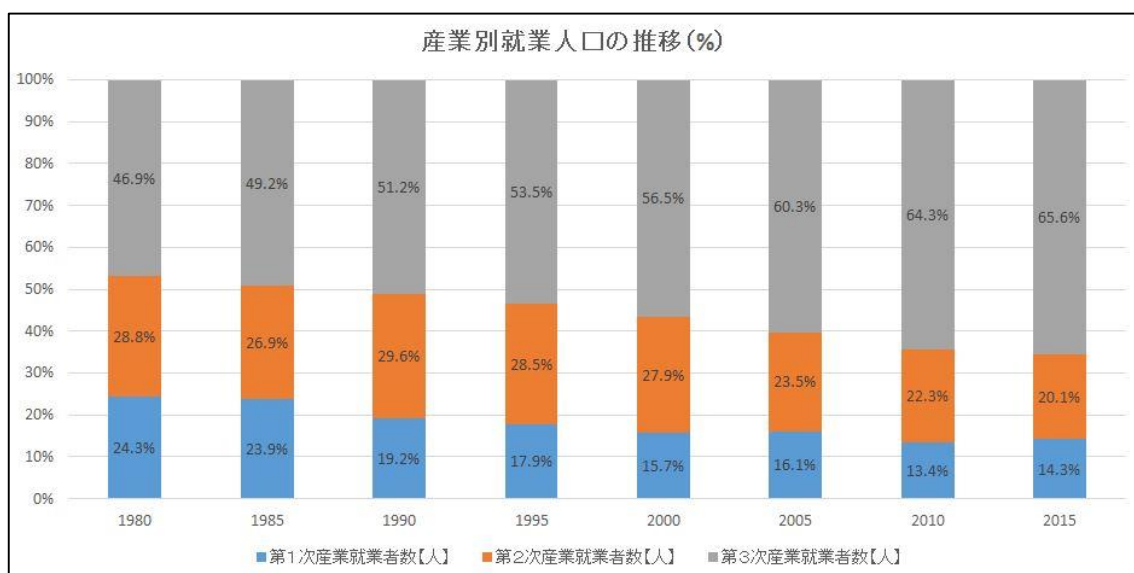
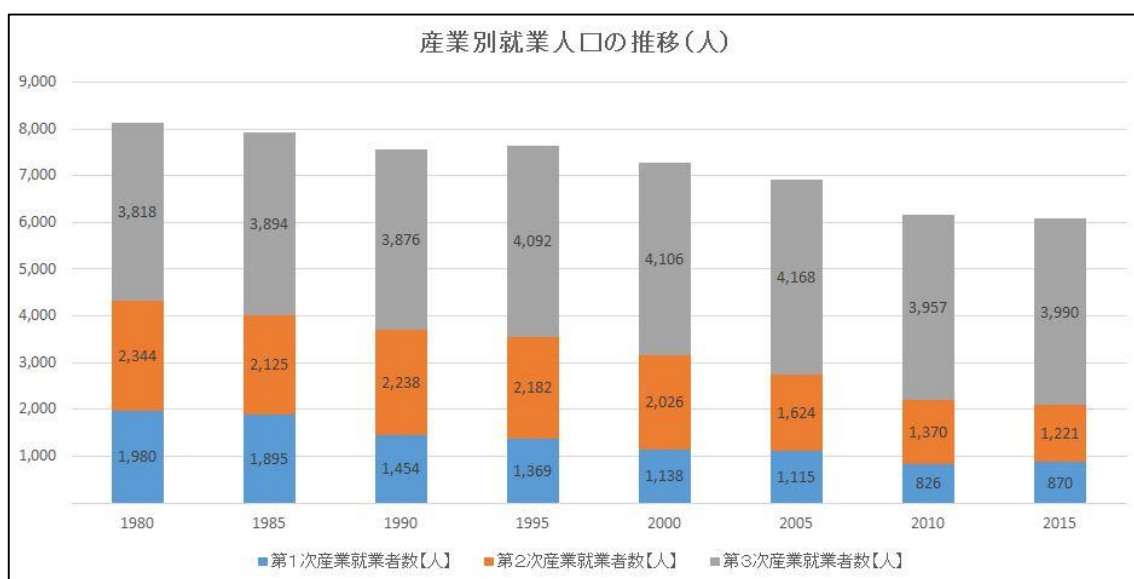
高速道路については、隣接する自治体に高知自動車道があり、最寄りの須崎東 IC まで国道 494 号経由で 15 分、伊野 IC までは国道 33 号経由で 30 分となっており、高知龍馬空港までは高知自動車道経由により、約 1 時間で連絡する。また、佐川町内においてはコミュニティバスとして「さかわぐるぐるバス」が運行している。



※この町の中心部をぐるぐる回る路線に加えて、「さかわぐるぐるバス」には、町の中心部と周辺部を結ぶ 8 路線がある。

(5) 産業

人口減少に伴い総就業者数も減少化が進み、昭和 55 年（1980）に約 8,100 人であったのが、平成 27 年（2015）には約 6,000 人にまで減少している。また、第 1 次産業の就業者数は平成 17 年（2005）に一度盛り返したものの、その後下落に転じ、後継者不足に歯止めがかからない状況にある。第 2 次産業は減少傾向、第 3 次産業は増加傾向にある。



（出典：平成 27 年国勢調査）

（６）観光

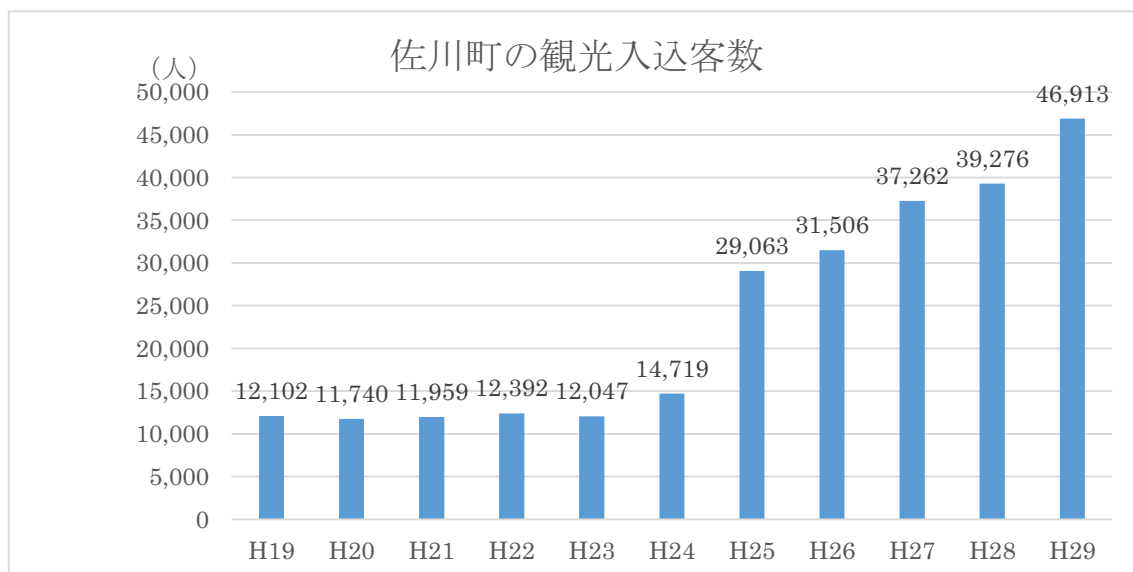
佐川町には、牧野富太郎博士らを輩出した豊かな自然環境に加え、県下屈指の酒蔵や旧商家住宅を中心とした建造物が、歴史と文化を感じられる町並みを形成している。酒蔵や歴史的建造物が建ち並ぶエリアは上町地区^{うえまち}と呼ばれ、佐川の主要観光エリアである。

以前は、佐川町で観光といえば、3月下旬から4月上旬にかけての極めて短い花見の期間に限られていた。しかし、第１期計画の事業開始以降、白壁の酒蔵や旧商家などの歴史的建造物の町並みが、徐々に注目を浴びるようになってきた。観光客数は、有名な観光都市と比較すると絶対数値は小さいが、歴史まちづくり事業により、伸び率は４倍と大きく増加している。平成２４年度までに第１期計画の事業が一部完了したことにより、観光客を受入られる体制が整い始めた。その結果、２５年度の観光客数は大幅に増加した。

佐川の町並みや酒蔵の白壁を活用したイベント「さかわ酒蔵ロード劇場^{さかぐら げきじょう}」には、一夜で６千人を超える人々が上町地区を訪れる。このイベントは、白壁をスクリーンに見立て、切り絵や映像を投影する、光のナイトイベントである。



【さかわ酒蔵ロード劇場の様子】



3. 歴史的環境

(1) 歴史

① 原始

I 縄文時代

佐川町の縄文時代の遺跡のうち、文化財に指定されている「不動ガ岩屋洞窟」と「城ノ台^{しろのだい}洞穴遺跡^{どうけついせき}」を紹介する。不動ガ岩屋洞窟は、国の史跡に指定され、城ノ台洞穴遺跡は、佐川町の史跡に指定されている。

不動ガ岩屋洞窟は、町の西南部に位置する西山耕^{にしやまこう}に所在する。

標高 200m ほどの山の中腹に大きな石灰岩の露出した部分があり、その基部^{きぶ}に南に開口する石灰洞がある。この石灰洞が遺跡である。

洞窟は、四国を横走する石灰岩帯中の鳥ノ巣石灰岩^{とり の す せっかいがんみやく}脈に属し、近くにも石灰岩の露出する山並が続いている。洞窟は二洞に別れ、第一洞は、幅 4 m、高さ 6 m の逆 U 字型で、奥行きは 8 m ある。第二洞は、第一洞側壁に開口する幅 4 m、高さ 2 m、奥行き 8 m の支洞である。この洞窟からは土器と石器が出土している。その土器は、細隆起線文土器^{さいりゅうきせんもん ど き}と呼ばれる縄文時代草創期のもので、県内最古の土器であると共に、わが国最古の土器群の一つである。

石器は、先端を鋭くとがらせた打製石器である尖頭器^{せんとうき}や原石を打ち欠いてつくった薄いかけらから製作した剥片石器^{はくへんせつき}などが出土している。



【不動ガ岩屋洞窟】



【尖頭器】



【剥片石器】

城ノ台洞穴遺跡は、町のほぼ中央部に位置する虎^{いた}杖野^{すりの}に所在する。石灰山の中腹に、入口の径約 2 m、それより 4～5 m の横穴があり、そこから傾斜角 40 度で下向した洞穴であった。現在、洞穴は全てこわされ跡形もない状況にある。この洞穴遺跡からは、シカ、イノシシ、イヌ、アナグマ、サカワオオカミなどの獣骨が発見されている。



【城ノ台洞穴遺跡】



【サカワオオカミの骨】

Ⅱ 弥生時代（写真等の出典：『佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集』）

弥生時代の遺跡のうち、「岩井口遺跡」と「二ノ部遺跡」は、平成 6 年度（1994）に発掘調査がおこなわれており、資料データがあることから、この 2 つの遺跡を紹介する。ただし、この 2 つの遺跡は、中世の遺跡も兼ねており、「岩井口遺跡」については、- ③中世 - の項でも再び取り上げることとする。その他、弥生時代の遺跡は「假又遺跡」「一ツ淵遺跡」「永野遺跡」などがある。

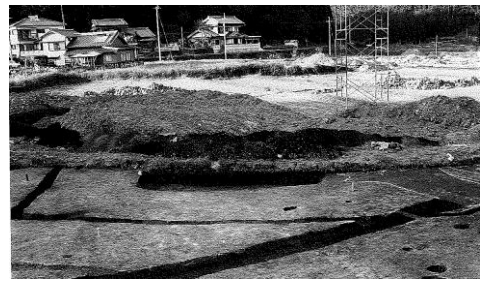
「岩井口遺跡」と「二ノ部遺跡」は、町の南の斗賀野地区に存する。

「岩井口遺跡」の^{たてあなしきじゅうきょあと}竪穴式住居跡は、北半分は未調査であるが、南半分では調査が実施され、一軒の住居跡が検出された。住居自体は方形の平面形で、4 本柱で棟を支えていたものと推定され、一部に壁溝がみられるごく一般的な形態をとっている。また、住居跡の検出面の端から 2.0～2.5m 離れた箇所に幅約 30



【岩井口遺跡-住居跡】

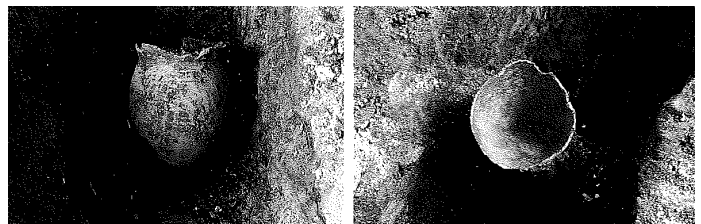
cmの周溝^{しゅうこう}が巡っており、住居を取り巻いていたものと判断される。高知県内では100棟近い数の竪穴式住居跡が調査されているが、このような形態のものは確認されていない。



【岩井口遺跡-周溝跡】

「岩井口遺跡」の竪穴式住居跡からは、叩目^{たたきめ}(※)のある土器が出土しており、弥

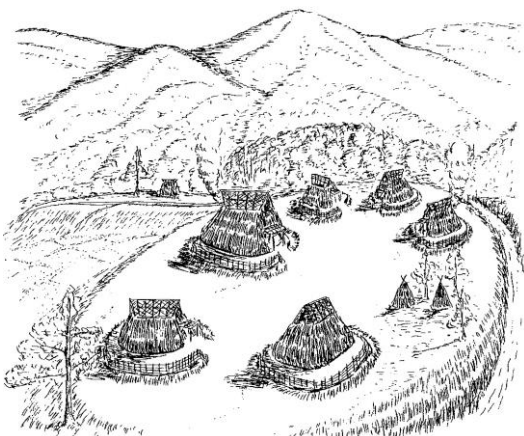
生時代終末期に該当させることができる。叩目が施された土器は、弥生後期後半以降高知県内一円にその分布がみられ、底部の丸底化と胴部の球形化に象徴されるように、土師器^{はじき}(素焼きの土器)へと移行していく。確認された土器は、その中でも比較的新しい段階に属するものと判断される。



【岩井口遺跡 - 弥生式土器 - 出土状態】

※叩目：土器の製作工程で土器外面を叩き締める調整が行われた形跡

二ノ部遺跡からは、竪穴式住居跡3棟を中心とした集落の一部や微高地^{びこうち}の頂部を南北に走る溝跡が検出されている。溝は水田への用水路とみられ、微高地と微高地の間で水田を作っていたのではないかと推察される。



【二ノ部遺跡の復元想像図】



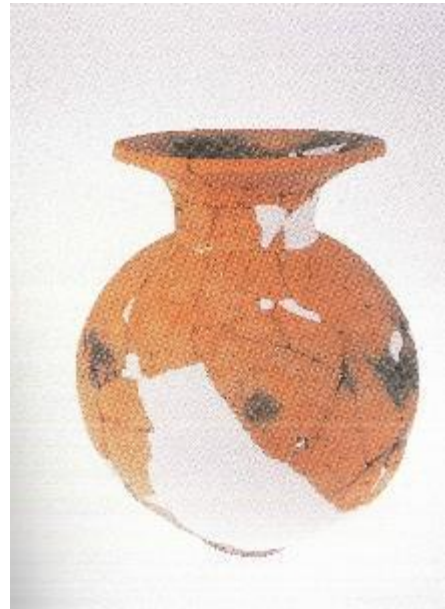
【二ノ部遺跡 - (上空より)】

二ノ部遺跡から出土した土器は、^{つぼ}壺、^{かめ}甕、^{こしき}甔、^{はち}鉢などである。壺について説明すると、口縁部がラッパ状に大きく開くもので、口頸部の高さに差違が見られる。底部は、ほぼ丸底で球形に近い胴部をなしている。

これら弥生式土器は、概ね後期後半から終末にかけてのものとみられる。



【二ノ部遺跡 - 弥生式土器（甕）】



【二ノ部遺跡 - 弥生式土器（壺）】

② 古代

I 古墳時代

弥生時代を過ぎ古墳時代となると、遺跡は全く確認されなくなる。当然、古墳時代となり生活に変化が生じ、居住地が移動したことによる遺跡数の減少も十分考えられるが、全く居住しなくなったとは考え難く、将来発見される可能性も捨てることはできないであろう。ただ、古墳などは全く存在しない。

II 奈良・平安時代

西暦 645 年の大化の改新後、^{たい か}律令制度が定められ、^{かいしん}班田収授の法が定まり^{りつりょうせい ど}租・^{はんてんしゅうじゅ}庸・^そ調の税制も整えられる。班田収授の元となる土地整備が^{じょうりせい}条理制である。佐川では、この条理の遺構が町の南部に位置する^{いこう}斗賀野盆地にあった。^{と が の ぼんち}条理遺構が現在まで整然と残ることは少なく、「^{ちようそ が へ ちけんちよう}長宗我部地検帳」(戦国時代、土佐国主であった長宗我部氏が土佐一国を^{てんしょう}天正 15 年 (1587) から数力年

かけておこなった検地の成果）が作られた頃には、すでに斗賀野の条理の遺構はくずれていたようであるが、大坪^{おおつぼ}とか国衙領^{こくがりょう}という条里制のなごりとみられる地名が一部残っている。

奈良時代に入り、先述した斗賀野盆地のなごりから考えても、まだ山深い里であった佐川も、徐々に律令体制の内に組みこまれるようになったと推測される。その実証として、古代窯業^{ようぎょう}を取り上げることができる。この時期の窯業址として、次の遺跡を挙げることができる。

芝^{しば}の端窯跡^{はなかまあと}、花^{はな}ノ木窯跡^{きかまあと}、円能^{えんのう}ヶタキ窯跡^{かまあと}、堂^{どう}ヶ鼻窯跡^{はなかまあと}の 4 窯跡である。

これらは、奈良時代末から平安時代にかけて営まれた窯跡である。

③ 中世（写真の出典：『佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集』）

I 遺跡

①原始 - II 弥生時代 - でも取り上げた「岩井口遺跡^{いわいぐちいせき}」と「二ノ部遺跡^{にのへいせき}」であるが、この 2 つの遺跡は、むしろ弥生時代よりも中世の方に特色がある。特に「岩井口遺跡」にはそのことがいえることから、ここでは「岩井口遺跡」を取り上げることとする。

「岩井口遺跡」は、高知県内発掘の中世館^{やかた}としては、田村遺跡^{たむらいせき}（南国市^{なんこく}）以来の発掘発見となった。館の規模は、東西約 45m、南北約 45m に及び、敷地面積は 2,025 m²で、当時としては比較的規模の大きな館（屋敷）であったものと推測される。館跡の構成は、四方に 1 条ないし 2 条の溝が走り、特に西側は溝の間隔が 5～6m もあり、土塁が設け



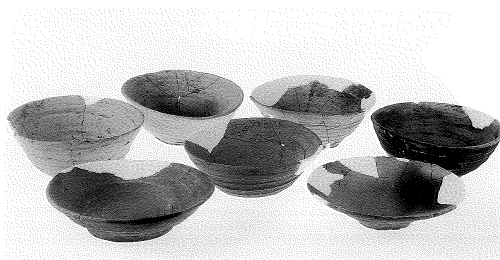
【岩井口遺跡の調査完了状態】

られていたのではないかと推察される。館内では、17 棟の掘立柱建物跡^{ほったてばしら}があり、館外では 18 棟の掘立柱建物跡が確認されている。棟方向はすべて東西の溝と平行し、整然と配置されていたことがわかる。館内外全体の構成をみると、中央に溝に囲まれた館（屋敷）を置き、周辺に小規模な建物を配していたことが窺^{うかが}えられ、領主（主人）、そのまわりに家来（従者、家人）、さらに外

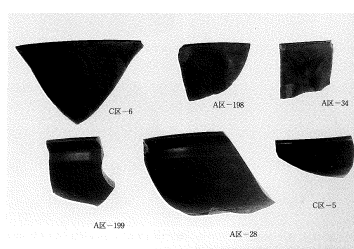
側に下人という形で配置されていたものと推察される。

出土遺物については、その大半は土師質土器(※)である。また、館内からは、青磁や白磁、備前焼などの高価な陶磁器類が出土している。

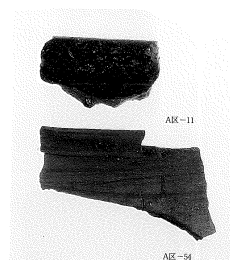
※土師質土器：素焼きの土器を土師器というが、中世以降の土師器をそれ以前と区別して「土師質土器」と呼ぶ。



【岩井口遺跡 - 土師質土器 (杯)】



【青磁 (碗)・白磁 (碗)】



【備前 (甕・搦鉢)】

Ⅱ 社会

中世佐川の社会そのものについての文献史料は極めて乏しい。このため - Ⅱ 奈良・平安時代 - で既述の 16 世紀末にできた「長宗我部地検帳」(別名「天正地検帳」)を頼りに中世佐川の社会を類推する外はない。従って、以下の記述では、中世的なものと思われる事象の一部を列挙するにとどまる。

地検帳を一見してまず目につくのは、おびただしい数の土居が各地に散在していることである。土居とは、土手・土塁を指し、転じて防御用にこれを周囲にめぐらした豪族屋敷あるいはその土地区画を意味する。

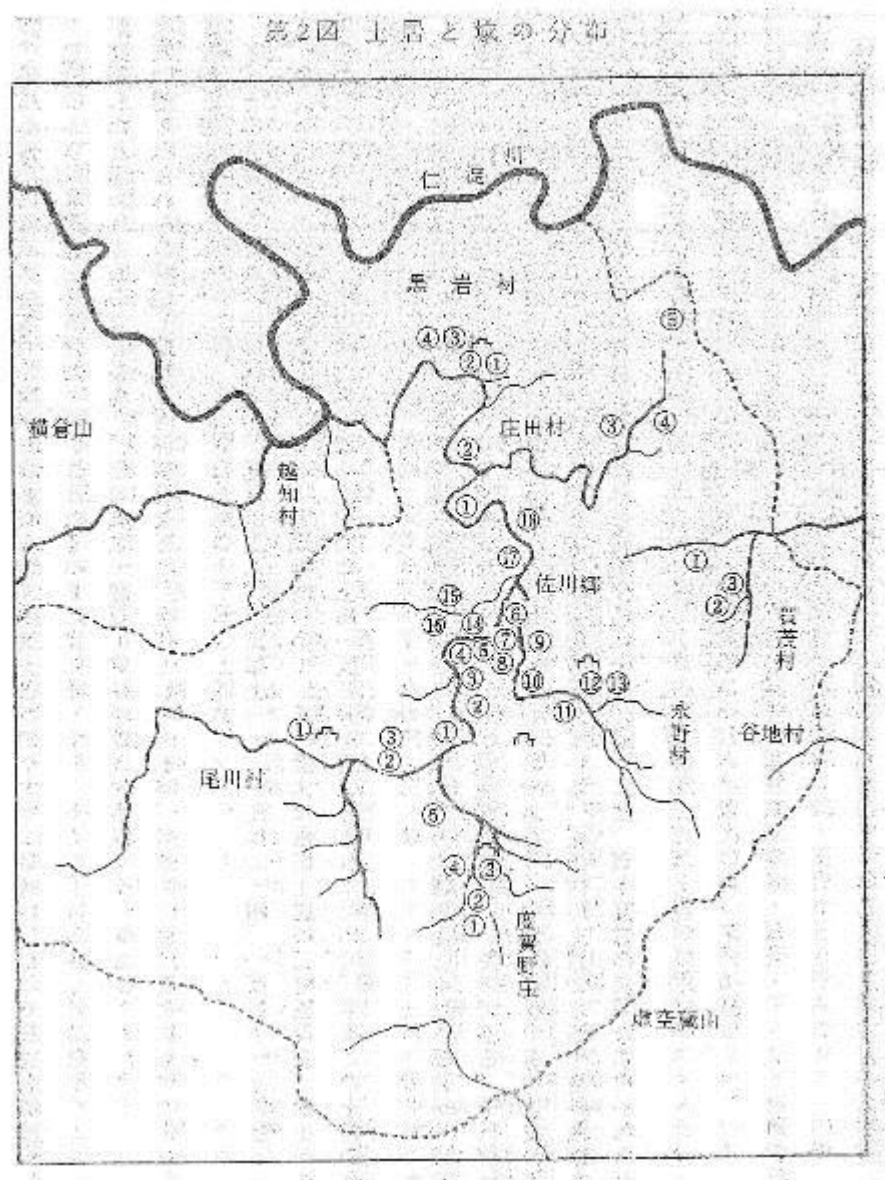
一般に環濠をとめない、規模の大きいものでは更に内部が小土塁により区分された複郭式もある。それは領主や有力名主の居館であり、屋敷城であり、また、兵農未分離な中世武士達が農業経営をおこなう拠点でもあった。従って土居は、単純な屋敷地ではなく、主人の居宅・倉庫以外に従者・下人の屋敷や菜園地を包含するのが通例で、時として水田をとこなう場合もあり、その面積は数反(1 反=991.74 m²)から数町(1 町=9,917.4 m²)に及んでいる。

次の表は、これら土居地称の土地を天正地検帳から摘出・概要を記したものであり、その次の図は、その分布を示したものである。

第1表 天正地検帳の土居

土 居	村	地 積	構成 (ヤシキ・その他)	名 諸 関 係
彦 賀 野 庄				
1 土居の内	馬 岡	3.13.4	中ヤシキ2.07.1・中田	茅柴新六給
2 テウテン土居	町 田	9.39.2	下ヤシキ 11.0・上中田	大高坂新蔵人給・巻五郎み
3 島田土居	島 田	2.5.10.0	ヤシキなし・上中下田	久武内蔵助給
4 伏尾土居	伏 尾	1.2.42.4	中ヤシキ2.42.0・上中下田	岡崎新左衛門給
5 土居屋敷	岩 井 口	4.16.1	ヤシキなし・中下田	久万六郎兵衛給
尾 川 村				
1 土 居	北地中屋	3.05.0	上ヤシキ3.05.0	尾川分・主ある
2 中土居	下 尾 川	1.17.0	上ヤシキ1.17.0	"・二兵衛ある
3 後土居屋敷	"	2.35.1	上ヤシキ1.20.0・中田	"・左兵衛ある
佐 川 郷				
1 クホ土居	柏 原	4.10.0	上ヤシキ30.0下ヤシキ2.00.0・下田	片岡分
2 岡崎土居	ウリウノ	3.20.3	上ヤシキ25.0下ヤシキ2.45.3	"・市正和
3 平賀地土居屋敷	下 神 崎	3.00.0	ヤシキなし・上田中田	"・太郎兵衛扣
4 夢河土居	"	8.47.2	"・上中下田	"・"
5 大クホ土居屋敷	"	9.12.0	下ヤシキ2.00.0・中下田	"・市尉扣
6 ハシウカ内土居屋敷	門 ノ	5.40.0	上ヤシキ1.40.0・中田	"・横島権介扣・吉兵衛み
7 三ノ野土居	川 湖	8.41.2	中ヤシキ1.40.0・上下田	"・権頭み
8 フキノノ土居屋敷	三ノ野島	6.00.0	ヤシキなし・上中田	"・右衛門尉扣
9 クホノ前土居	青 去	1.31.0	上ヤシキ1.31.0	"・将監扣居
10 久万田土居	熊 田	2.40.2	中ヤシキ2.20.0・下田	中村分・越前守み
11 西土居	横 田	2.15.0	ヤシキなし・上田	久武左衛門佐給
12 土居屋敷	内 原	1.30.0	中ヤシキ1.30.0	河田忠兵衛給・主み
13 "	"	4.32.0	中ヤシキ4.20.0・下田	中村分・与衛門み
14 土居の内	河 内	1.6.40.0	ヤシキなし・中下田	"・与左衛門扣
15 岡本土居	"	1.35.0	上ヤシキ1.35.0	"・主み・土み
16 猿田土居	"	5.03.0	上ヤシキ1.03.0下ヤシキ4.00.0	竹内玄蕃土地・虎助扣・主み
17 土居屋敷	市 ノ 瀬	1.36.4	上ヤシキ1.36.4	片岡分・又十郎ある
18 土 居	馬 野 原	4.06.3	上ヤシキ4.06.3	"・神衛門扣居
庄 田 村				
1 土居屋敷	八 幡	4.30.2	下ヤシキ4.25.2・茶かち	片岡分・焼桑名・太良兵衛尉居
2 土居屋敷	イ セ キ	5.46.0	下ヤシキ5.46.0	中村分・矢野源十郎給・主居
3 土居屋敷	二 ツ 野	1.02.0	下ヤシキ1.02.0	片岡分・片岡大炊給
4 上土居	"	1.35.3	下ヤシキ1.35.3	"・小田源兵衛給・主居
5 土居屋敷	四 ツ 白	3.21.0	下ヤシキ3.11.0・かち	"・柳瀬彦兵衛給
黒 岩 村				
1 ナカタ土居	黒 岩	1.0.36.2	下ヤシキ2.02.2・中田	片岡分・片岡又七良給
2 土 居	"	1.48.0	上ヤシキ1.48.0	"・御土居
3 西土居	"	4.31.0	下ヤシキ1.00.0・下田	"・片岡金千代給・主作
4 太平土居	台 十	1.33.0	中ヤシキ1.33.0	"・片岡森大夫居
賀 茂 村				
1 末光土居屋敷	か も	36.0	中ヤシキ 36.0	片岡分・片岡与五郎給・主居
2 大谷土居屋敷	永 竹	1.03.0	上ヤシキ1.03.0	"・片岡治郎給・主居
3 カチチカ土居	"	1.03.0	上ヤシキ1.03.0	"・片岡次郎兵衛給・主居

(町・庄・代・步)



【表・図 - 出典：「佐川町史上巻」】

なお、- I 遺跡 - で取り上げた「岩井口遺跡」は、「天正地検帳」の表の中で、上から 7 段目の岩井口の「土居屋敷」のことではないかと、遺跡調査を担当した専門家は判断している。

④ 長宗我部治下の佐川（戦国時代）

長岡郡岡豊ながおかぐんおこうを本拠とする長宗我部国親くにちかが、高知平野西部に対し戦端を開いたのは、永禄3年（1560）5月のことであった。翌月国親は死ぬが、以後その子元親もとちかにより本格的な土佐の統一戦が展開する。

この戦いの過程において、佐川の城主中村越前守なかむらえちぜんのかみはその地位を娘婿久武内蔵助ひさだけに奪われ、久武氏を筆頭に佐川城へ進駐した長宗我部直臣団くらのすけが、高北こうほく（高岡郡たかおかぐんの北部の意味）における支配体制の要となった。

その後、天正2年（1574）、元親は、幡多はたの一条氏いちじょうを滅ぼし土佐を統一した。佐川城主久武内蔵助は、長宗我部の筆頭重臣の立場となった。

元親は、同4年（1576）から四国征服戦に着手する。その戦略は、土佐の東部に位置する安芸・香我美2郡あきかがみの兵を以て阿波あわ（現在の徳島県）を攻め、高岡・幡多の兵をして伊予いよ（現在の愛媛県）侵攻の主力とし、長岡・土佐・吾川3郡の兵を遊軍とするものであった。

佐川城主久武氏さんか傘下の高北の武士は、連年伊予の戦野に動員された。

そして、同13年（1585）、長宗我部元親の四国平定が完了した。しかし、その直後、豊臣秀吉とよとみひでよしの四国征伐が開始される。元親は、必死の防御に努めたが、圧倒的優勢を誇る豊臣軍の前に撃破され、同年8月、土佐一国安堵あんどを条件に降伏する。豊臣政権下の一大名に転落した長宗我部には、秀吉による全国統一戦さらには朝鮮出兵への参加など軍役負担が強要された。

佐川城主久武内蔵助は、これらの戦いの中で家臣を多数失っている。

⑤ 近世

佐川の近世史は、支配体制の異なる二つの部分からなる。一つは、土佐藩筆頭家老深尾氏とさはんひつとうかうふかおの佐川領さかわりょう（旧佐川・加茂・斗賀野・尾川の各町村及び黒岩の一部）であり、もう一つは、土佐藩直轄の本藩領黒岩郷ほんぱんりょう（庄田・瑞応を除く旧黒岩村）である。そして、前者を語るためには、町域外の日高・越知・仁淀各町村を含む高北佐川領全体の歴史に触れざるを得ない。

I 佐川領の成立

慶長6年（1601）、土佐の新国主山内一豊やまうちかつとよは、国内の要所に重臣を配置して領内支配体制を整えた。その内の一人が佐川城付一万石に封ぜられた土佐藩筆頭家老深尾重良である。深尾氏はその時点から、明治2年（1869）の

はんせきほうかん
版籍奉還に伴う土佐藩消滅まで、11代・268年間、一貫して高北佐川領18カ村を支配した領主である。その間、土佐藩での最上席家老の座は譲らず、幕末の家老13家の内5家が、深尾氏とその一門で占められていた。

また、土佐藩の家老には、城下高知に定在府する平家老と領内要地に土居を構えることを認められた土居付家老があるが、深尾氏は最大の土居付家老で、城下町の中心部である土居下町佐川に家臣団と町人を集住せしめ、領内の政治と経済を支配した。高北盆地から土予国境（現在で言えば高知県と愛媛県の県境）の山村に及び佐川領は、他支配を混じえない地域的完結性をもち、その領民に対する権限も強大で、深尾氏は死罪を含む重罪裁判権を行使し得た。このような藩内の小大名というべき深尾領主権のあり方は、全国的にみても稀少な部類に属する。

深尾家臣団は、騎馬と称された侍分と足軽以下の軽格・奉公人よりなるが、藩軍制上では、これに藩から預けられた郷士（在郷武士）50騎を加えた佐川組が一軍団として行動した。深尾氏の家臣・郷士の総数は、幕末最終段階で家族を含め3,200人を超えた。

佐川領の経済は、里分9カ村・山分9カ村といわれた両地域の異質な生産力を基盤に、流通機能を土居下町人町へ集中することにより成り立っていた。里分諸村からは米、山分からは紙・茶などの特産品又は代納銀を徴収した。

佐川領一万石の中枢部は「御郭内」と呼ばれ、土居・侍町・町人町からなった。町人町の創設者は、高知その他から誘致した武士的豪商で、領主との関係は主従制に近いものがあつた。その後幅広い新興商人層が形成されるが、上層の富商は御目見町人（深尾の殿様に会うことができた町人）として領主財政や領内の経済統制に深い関わりを持っていた。

一般町人は、平町人と称し、その中には多種多様な技術を持つ職人がおり、武器類から絹織物、酒などの生産に従事していた。

この佐川領の成立は、高北の政治体制における中世の終焉を意味し、ここに深尾氏を中心とした強力な近世的支配が始まるのである。

Ⅱ 近世村の成立

佐川領の成立による変化は、支配の単位すなわち行政区画においても現れ、中世の庄・郷にかわり村が主役になる。中世郷村の分割などの再編成により

近世村落の村域を確定することを村切と呼ぶ。この村切により、里分9カ村・山分9カ村合わせて18カ村となった佐川領の村落編成が完成する時期については、的確な史料を欠くが、遅くとも寛文7年（1667）以前のものと推測される。

Ⅲ 深尾の歴代と特権

初代重良に始まる深尾氏の歴代を次の表により示す。

第6表 佐川深尾氏の歴代

代	諱	通称	父	母	誕生	家督	致仕	逝去(寿)	法号
11	重愛	市太郎・内記 刑部・市郎	重教(三男) 足達氏女	弘化 三・八・一四	万延元・七 明治四・一二	文久二・九	明治五・七・二三 (二七)		
10	重先	馬吉・鼎・康臣	深尾重豊 深尾成有女	文政 一〇・正・一三	嘉永六・一一 文久二・九	万延元・七 明治四・一二	明治二三・一・三一 (六四)		
9	重教 (行)	幸弥・相模	繁寛(三男) 西氏女	文化 元・一一・二二	文化九・五		嘉永六・一〇・三 (五〇)	広徳院俊岳全威	
8	重世	丑之助・銀三郎 左兵衛・左京	繁寛(長男)	天明 五・一二・二五	文化六・三		文化九・三・一一 (二八)	天真院本源自性	
7	繁寛	金之助・平右衛門・因幡	繁澄(長男)	宝暦 九・一一・一九	寛政 一一・一一・一一		文化六・二・二〇 (五二)	乾光院元道宗亨	
6	繁澄 (茂)	信之助・湯右衛門・左近・因幡	山内茂信(長男) 繁峰女	寛保 元・三・廿一	宝暦二・九	寛政 一一・一一・一一	文化二・八・一二 (六五)	龍潭院月底道頼	
5	繁峰 (重)	孫八・左京・平右衛門	重方(長男)	元禄 一〇・六・二三	宝永三・九		宝暦二・四・二七 (五六)	兼徳院仁谿道沢	
4	重方	八郎・若狭・稠	深尾重次(長男) 児嶋氏女	寛文 一二・四・二〇	元禄二・三	宝永 三・九・一一	享保一六・三・二四 (六〇)	輪照院桂瑞曜白	
3	重照	孫八・因幡	重昌(二男) 深尾重忠女	元和 二・四・二九	寛文二・二		元禄二・閏正・二 (七二)	景雲院静光深山	
2	重昌	吉六・出羽	山内康豊(三男) 水野氏女	慶長三	元和五・九	寛文二・二	寛文一二・八・二五 (七五)	涼松院仁峰義庸	
1	重良	湯右衛門・与右衛門・和泉	深尾重政 塚本氏女	弘治三		元和五・九	寛永九・三・二七 (七七)	青源院盛嶽宗安	

【深尾氏歴代佐川領主 - 出典：『佐川町史上巻』】

- 深尾の土佐藩における権限内容については、深尾旧臣の編んだ『梅乃薫』に「深尾氏の土佐国に於ける位置」という一節を設け、次のように記されている。
- (一) 生殺与奪の権を付与せられ、領内奸悪の徒は、禁獄・追放・死刑と雖之れを施行せり。但死刑施行の事は嘉永の頃其例を廃せられ、高知に於いてすることゝなりたり。
- (二) 藩侯在国の時は概ね必ず高知の邸に在りて、国政の補佐・枢機の顧問に参与せり。
- (三) 藩侯参勤出府の際は、佐川の土居に帰住あり。委嘱によりて国政に執掌し、諸司の政を執るや大小となく必ず先づ深尾氏の指揮を仰ぐ。故を以て大事は有司自ら佐川の土居に來りて其決裁を乞ひ、小事は書を以て之れを伺ひ、指令を待ちて後之れを処理せり。又諸司任免の如きも、藩侯出府中は佐川に召喚して命ぜらるゝの慣行あり。…



【梅乃薫】

⑥ 近現代

明治3年（1870）5月には太政官^{だじょうかん}の布告によって旧来の庄屋制度が廃されて、新しく郷制がしかれ、庄屋に替わる郷正の職が任ぜられ、郷の政治に当たるようになった。

佐川では、佐川本村^{さかわほんむら}、永野^{ながの}、谷地^{やつち}、斗賀野^{とがの}の4村が合併して斗賀野郷となり、三野^{みの}、尾川^{おがわ}、越知^{おち}を合して三野郷とし、加茂^{かも}、岩目地^{いわめじ}、庄田^{しょうだ}、瑞応^{すいおう}の4村は黒岩^{くろいわ}に合して黒岩郷となった。

翌4年（1871）7月の廃藩置県で、土佐藩は高知県と改められ、藩庁は県庁となり、藩主の名は消えて参事となり、間もなく参事の名は県令となり後県知事となった。

I 佐川の町制施行

明治32年（1899）10月25日の佐川村会において、佐川村を町に変更することを議決し、上申書を高知県知事あてに提出した。こうして新生佐川町は発足し、このとき、旧来の佐川村を甲^{こう}とし、三野は柳瀬川の流域を界としてその東岸部を乙^{おつ}とし、西岸部を丙^{へい}とし、これをもって地番の符号とした。

II 明治期の出来事

元佐川領主深尾氏が土佐藩主山内一豊の命により佐川に入封したのが慶長6年（1601）であることから、明治34年（1901）10月10日に「深尾家受封三百年祭ならびに佐川郷創始三百年記念式」が催されている。そのとき、余興として上洛騎馬武者行列や郷土芸能（斗賀野の花取踊、四ツ白の太刀踊など）、狂い火（仕掛け花火）、豊年踊、相撲などがおこなわれ、1万人以上の集客で賑わった。

中でも上洛行列は、江戸期佐川領主深尾氏が上洛（京都に行くこと）したときの行列に擬^きしたもので、駕籠^{かこ}の中の殿様を警



【上洛騎馬武者行列 - 出典：「梅乃薫」】

護する騎馬の鎧よろい、冑かぶとの武者姿から、扈從臣こしょうしん（お供の家臣）たちの袂姿かみしも、武器その他の器具も昔のものを用い、先頭が毛槍けやりをなびかせて、「お通りー、下に、下に」の奴やつこの声につづく歩行、足軽、目付役、扈從、御坊主、草履取そうりとりにいたるまで旧態そのままの行列であった。

Ⅲ 大正期の出来事

大正 5 年（1916）11 月 8 日、土佐鉄道北廻り線が決定して、佐川町に鉄道が敷設されることが間違いなしとなった。

その後、国鉄駅舎の争奪戦が始まる。佐川市街地に近く一駅を設置することが発表されると、町民はこぞってその位置に注目した。鉄道院の予定としては、中央の三野みの、久万田くまだ付近が適所とされたが、これに対して佐川の市街地は東町ひがしまちとする東部説と、町のより発展を願う中央説と、地域の便を第一とする西部説の三つ巴となった駅舎の争奪運動が繰り広げられた。

結局、この問題を収拾するには東西二つの駅をつくる外ないという結論となり、鉄道院もこれを肯定して、佐川駅さかわえき、西佐川駅にし さかわえきの両駅がつくられることになった。

この、佐川町に鉄道が敷設されることになったこと、及び二つの駅をつくることになった収拾案で鉄道院を動かした陰には、佐川町出身の宮内大臣くないだいじん田中光顕たなかみつあきの政治力が大きく働いたと伝えられている。

Ⅳ 昭和の大合併

昭和 28 年（1953）の町村合併促進法の成立、施行により、全国で町村の再編・合併が進んだ。これにより村の数は、8 分の 1 と大幅に減少した。

佐川町も例外ではなく、内部的には紆余曲折はあったが、合併がなされた。なお、平成の大合併では、佐川町は、合併に向けての動きはあったが合併には到っていない。

※ 佐川町の合併を示す図は、第 1 章 - 2 社会的環境 - （1）町の沿革 - に記載。

(2) わが町が輩出した主な人々

佐川を治めた^{ふか お}深尾氏は代々文教政策に力を入れた。その結晶が郷校「名教館」である。当校の教育は、天文学、数学、英語などかなり高度なレベルであったと伝えられている。この名教館から幾多の^{しゅんしゅう}俊 秀 が巣立っていった。いわば名教館は、文教の地のルーツといえる存在である。こうした文教の歴史から、佐川町は幕末から明治・大正・昭和にかけ、名教館出身者を含めて^{あまた}数多の文教人を輩出してきた。佐川の風土と文化が生んだ文教人は今なお、町の人びとの誇りとして、あるいは見習うべき先輩として、文教のまちに息づいている。

以下、文教の基礎を築いた^{ふか お}深尾氏を筆頭にわが町が輩出した主な人々を紹介する。

○ ^{ふか お}深尾家歴代 [第1章 - (1) - ⑤ - Ⅲの歴代の表を参照]

慶長6年(1601)、関ヶ原の戦いで軍功を認められた^{やまうちかつとよ}山内一豊は土佐一國を拝領し、その筆頭家臣である^{しげよし}深尾重良に、佐川城を中心とした城付き領地一万石を分け与えた。これが佐川領主深尾家の始まりである。以後、初代重良から11代^{しげなる}重愛まで268年間、佐川領主であると共に土佐藩筆頭家老職であり続けた。その歴代の中で、6代^{しげすみ}茂澄が^{あんえい}安永元年(1772)一家の子弟のために家塾名教館を設け、7代^{しげひろ}繁寛が^{きょう わ}享和2年(1802)家臣団にも門戸を広げて郷校とした。そして、^{ごうこう}天保元年(1830)、9代^{しげのり}重教が郷校名教館の校舎拡充と教授陣の充実を図った。

右の写真は12代^{しげたか}重孝で、もはや佐川領主でない時代の深尾家の当主である。

影 眞 之 君 孝 重 尾 深



【12代深尾重孝】

○ 牧野^{まきの}富太郎^{とみだろう} [文久^{ぶんきゅう}2年(1862)～昭和32年(1957)]

「日本植物学の父」として世界中から敬愛されている植物学者牧野富太郎博士は西町の酒屋^{にしまち}岸屋^{きしや}の生まれであり、庶民に開放された名教館^{めいこうかん}で学ぶ。一方で、幼時から興味をひかれた植物について独学で学び、成長した後は東京と佐川を行き来しながら出入りを許された東京大学（後の東京帝国大学）で知識を深め、同校を拠点として研究を重ねる中、1,500種類以上の新種などを発見・命名した。その中には、サカワサイシンのように佐川の名を冠したものもある。サカワサイシンは「町の花」に指定されている。



○ 田中^{たなか}光顕^{みつあき} [天保14年(1843)～昭和14年(1939)]

佐川領主深尾家の家臣である浜田家の子として上郷^{かみごう}に生まれた。土佐勤王党^{とさきんのうとう}に加わり、脱藩、勤王の志士として長州藩のもとで活動。陸援隊隊長・中岡慎太郎^{なかおかしんたろう}の死後は、陸援隊を率いて王政復古の大号令を成功させるための出兵を成功させるなど、明治維新に貢献した。維新後は、戸籍正・陸軍会計監督長・警視總監・宮内次官・宮内大臣などを歴任。後年、佐川町のために育英事業、文化事業など多大の貢献をした。



○ 伊藤^{いとう}蘭林^{らんりん} [文化12年(1815)～明治28年(1895)]

儒学者伊藤徳正^{のりまさ}の子として目細谷^{めぼそだに}に生まれる。名教館に学んで後、長じてからは名教館末期の教授となり、多くの深尾家臣子弟を訓育した。田中光顕以下佐川郷内から輩出した勤王志士は、皆、蘭林門下から出ている。田中光顕が宮内大臣となり、功成り名遂げて、脱藩以来の故郷に錦を飾ったとき、真っ先に訪れたのは目細谷にある蘭林の墓前であった。書をよくし、漢詩文に^た長け、和歌もよくした万能の学者だったので、明治維新後、名教館廃校後も、終生家塾を開いて郷内の子弟を教導した。



○ 広井 勇 ^{ひろいさみ} [文久2年(1862)～昭和3年(1928)]

佐川領主深尾家の家臣である広井喜十郎 ^{きじゅうろう}の子として上郷に生まれる。曾祖父遊冥 ^{ゆうめい}は名教館で漢文・算術・兵学などを教えた教授であった。

札幌農学校で、先端技術を学び土木工学の技術者となった。アメリカやドイツで当時の最先端の土木工学を学んだ後は、母校札幌農学校で教鞭をとりながら、橋梁学 ^{きょうりょうがく}や港湾工学の分野の技術者としても活躍した。特に、小樽港に日本初のコンクリート製防波堤を完成させるなど、数々の港湾工事に関わった功績から「日本港湾工学の父」と称されている。

このように自身が優れた技術者であった一方で、札幌農学校（後の北海道大学）や東京帝国大学（後の東京大学）で後身の育成に尽力し、その門下からは世界で活躍する多くの技術者を輩出した。



○ 土方 寧 ^{ひじかたやすし} ^{あんせい} [安政6年(1859)～昭和14年(1939)]

佐川領主深尾家の家臣である土方直行 ^{なほゆき}の子として奥 ^{おく}の土居に生まれる。名教館に学び、維新後は家族で東京に移り住み、東京大学法学部卒業後、英国に留学しバリストル（法廷弁護士）の学位を取得。帰国後、同大教授として教鞭をとり、英国法・民法研究の第一人者として活躍。貴族院議員も務める。英吉利法律学校 ^{いぎりす}（現中央大学）の創立者の一人。



○ 古沢 滋 ^{ふるさわしげる} ^{こうか} [弘化4年(1847)～明治44年(1911)]

佐川領主深尾家の家臣である古沢八左衛門 ^{はちざえもん}（南洋）の次男として上郷に生まれる。古沢家は代々剣術で知られる家で、祖父与一左衛門 ^{よいちざえもん}は名教館で無外流 ^{むがいりゅう}剣術を教え、父八左衛門は深尾家の剣道指南であった。しかし、滋の方はどちらかというと学問が得意で、幼少の頃から秀才として知られていた。



維新後は新政府に出仕し、明治3年（1870）官命で英国へ留学。政治経済を学んで帰国した明治6年、板垣退助の依頼により民選議院設立建白書を起草するなど、自由民権運動に傾倒するが、後に国家主義に転向し県知事や貴族院議員をつとめた。

○ 森下雨村 [明治23年（1890）～昭和40年（1965）]

上郷の生まれ。本名森下岩太郎。早稲田大学を卒業。日本で初めて海外の探偵小説を紹介した雑誌「新青年」が博文館で創刊されると、編集長として多くの作家や翻訳者を育成した。推理小説黎明期の日本の巨匠として知られる江戸川乱歩、大下宇陀児、横溝正史なども森下が育ての親といわれている。



自身の作品も書いており、外国小説の翻訳も多数手がけ、探偵小説を日本に広めるために尽力した人物として「探偵小説の父」と称されている。

晩年は、故郷・佐川へ移り、自然とふれあう生活を主とし自由に生きた人でもある。大の釣り好きで、自身の釣りについて書いたエッセイ『猿猴川に死す』など、探偵小説以外の著作もあった。

○ 西谷退三 [明治18年（1885）～昭和32年（1957）]

西町の生まれ。本名を竹村源兵衛といい、裕福な薬種問屋に生まれ、家業を継ぐために札幌農学校に進むが、途中退学して帰郷、家業と距離を置き、趣味の読書を楽しむ生活を送る。



約2年という長期間の欧米旅行で『セルボーンの博物誌』で紹介された、イギリス南部ハンプシャーにあるセルボーン村を訪問し、帰国後はライフワークとして同書の翻訳に取り組む。

「解体新書」の和訳初版本や、英語辞書が編纂された草創期の稀少辞書などを含む1万冊を上回る西谷の蔵書は、西谷の死後佐川町が購入し、現在は佐川町立青山文庫で「西谷文庫」として保管している。

○ ^{みすのりょう}水野 龍 [安政 6 年 (1859) ~ 昭和 26 年 (1951)]

上郷に生まれる。少年時代、佐川領主深尾氏の松山征討に少年鼓笛隊の一員として加わったと伝わる。

明治 30 年頃に激化した排日運動に対して、「これを嘆き移民問題の改善に身を捧げる決意をした」と後に回顧しているように、明治 36 年 (1903) ^{こうこくしょくみんこうしがいしゃ}皇国植民合資会社を設立し、ブラジル移民事業の端緒を開く。そして、明治 41 年 (1908) 4 月 28 日、自身も同乗した ^{かさどまる}笠戸丸で第 1 回ブラジル移民を送り出した。

これ以降、約 2 万人の移民を成功させ「ブラジル移民の父」と呼ばれている。



○ ^{やまさきまさみつ}山崎正光 [明治 19 年 (1886) ~ 昭和 34 年 (1959)]

^{ほんみの}本三野に生まれる。明治 38 年 (1905) 単身アメリカに渡り、天文学に興味を持つ。カリフォルニア大学在学中に「反射望遠鏡の製造法」を発表し、卒業時に学術優秀としてバチェラー・オブ・アーツの学位を得る。帰国後、京都帝国大学宇宙物理学教室の講師となる。昭和 3 年 (1928)「クロムメリン彗星」を発見する。この発見により、アメリカの太平洋天文学会からドノホー賞牌第 124 番を日本人として初めて授与される。



○ ^{しもやかわけいすけ}下八川圭祐 [明治 33 年 (1900) ~ 昭和 55 年 (1980)]

^{よっしろう}四ッ白に生まれる。大正 15 年 (1926) 東洋音楽学校 (現東京音楽大学) を首席で卒業。オペラ歌手として活躍する傍ら、昭和 5 年 (1930) 下八川圭祐声楽研究所を開設、後進の指導にあたった。藤原歌劇団を主としてバリトン歌手として公演を続けた。昭和 44 年 (1969) 昭和音楽短期大学学長就任。死後、高知県に下八川賞が設けられ現在まで続いている。故郷佐川町にも「学芸振興下八川基金」を設け、芸術文化活動の助成を行っている。



また、彼の音楽志望への糸口は、牧野富太郎が若き日に持ち帰ったオルガンに魅せられたことによるという。

○ 広瀬 東畝 [明治8年(1875)～昭和5年(1930)]

上郷に生まれる。好きな画を学びたいと、初め南画を天野
瘦石に師事し、燕石と号した。明治31年(1898)上京し
て荒木寛畝に日本画を学び、東畝と号した。文展(＝文部省
美術展覧会)入賞6回、数作品が帝展(＝帝国美術院美術展
覧会)の無鑑査となり、その作品は数回宮内省に買い上げら
れた。また、東京女子高等師範学校、東京高等工業学校など
の教授を歴任した。花鳥画を最も得意とし、優雅、佳麗な作
風であった。



【広瀬東畝作：雁之図】

こうした人々は決して偶然に佐川町の出身であるわけではなく、藩政時代から連綿と続く文教の伝統が育んだものである。

4. 文化財等の分布状況

「歴史と文教のまち佐川」といわれる佐川町には、平成 30 年（2018）4 月現在で 67 件の文化財が所在している。国指定の文化財が 3 件あり、国登録の有形文化財が 3 件、県指定の文化財は 8 件、町指定の文化財は 53 件である。

■指定等文化財件数（平成 30 年 4 月現在）

種 類		国		県指定	町指定	計
		指定	登録			
有形文化財	建造物	1	3		5	9
	絵画				1	1
	彫刻	1		2	3	6
	工芸品				7	7
	書籍・典籍				1	1
民俗文化財	有形の民俗文化財					
	無形の民俗文化財			2	2	4
記念物	遺跡	1			12	13
	名勝地			2		2
	動物・植物・地質鉱物			2	22	24
計		3	3	8	53	67

（１）国指定文化財

本町には、建造物、彫刻、遺跡、各 1 件の国の指定文化財が所在する。

【竹村家住宅】

国の指定重要文化財の「竹村家住宅」は、寛文年間（1661～1673）に高岡村（現土佐市）より初代竹村務平が来住、享保年間（1716～1736）より



【竹村家住宅】

酒^さ甫^か手^て（酒造権）を借り受け、酒造業を開始した家系で、寛^{かん}保^{ぽう}元年（1741）に酒甫手を得て名実ともに酒造家として独立した。その後、家業は順調に推移し、深尾氏に謁見が許される御目見町^{おめみえちょうにん}人、さらに名字帯刀も許され、明^{めい}和^わ7年（1770）に「黒金屋」の屋号を深尾家より賜る。竹村家は江戸中期以降、幕府が諸国大名・旗本の監視と情勢調査のために派遣した巡^{じゅん}見^{けん}使^しの幕府巡見使宿を務め、江戸後期には深尾家に多額の資金調達をするなど、佐川屈指の商家であった。

現在の建物は、店舗部が安永9年（1780）、主屋・座敷部は天保9年（1838）に改築されている。表門と塀も同時期のものである。「竹村家住宅」は武家住宅に準ずる書院造^{しゅいんづくり}の上質な座敷を構え、土佐における有力商人の住宅として貴重である。

（2）国登録文化財

本町には国の登録有形文化財（建造物）3件が存在する。

【旧 竹村呉服店】

旧竹村呉服店は、重要文化財の「竹村家住宅」の西隣に位置している。竹村本家から安永6年（1777年）に分家した家系で、代々安右衛門^{やすえもん}を襲名した。当初は質屋を営み、のちに呉服商及び雑貨商へと発展し、屋号を㊦（まるきゅう）と称した。



【旧竹村呉服店 主屋】

現存する店舗と主屋は木造2階建てで、店舗は天保元年（1780）頃に建てられ、当初は別棟だった蔵が後に改修で一体化したとみられる。

店舗の外壁は海鼠壁^{なまこかべ}で、蔵の壁は格子柄を斜めに配した四半張りとし、アクセントをつけている。主屋の1階は長押を回さず地味な設えだが、2階は華美な仕様の欄間等がある。土蔵は明治時代中頃の木造2階建てで、東・南両面は漆喰壁、西・北面は一部板張りである。

3代安七^{やすしち}の頃、土佐国西部では唯一の絹物商として発展し、この安七が店舗と

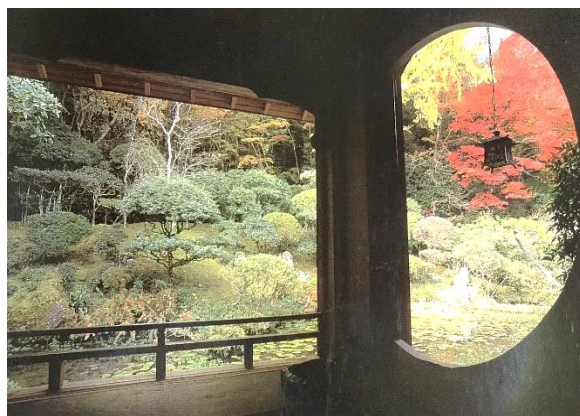
住居を別棟として内部を連続させた二階建ての立派な家を新築したが、竹村家文書により伝えられている。家業は順調に発展したが、昭和初期に廃業し、貸家とした。

平成 26 年 6 月にこの土地建物が町へ寄贈され、耐震改修工事後、平成 28 年 10 月から 1 階の一部を貸出し、店舗として活用するとともに一般公開している。

(3) 県指定文化財

当町には、彫刻 2 件、無形民俗文化財 2 件、名勝 2 件、天然記念物 2 件、計 8 件県指定文化財が存在する。

佐川町には土佐三名園のうち二つが、高知県指定の名勝として存在している。慶長 8 年（1603）に土佐藩主山内一豊に招かれ、遠州掛川から入国した丈林和尚を開山とし、佐川領主深尾家の菩提寺として創建された青源



【乗台寺庭園】

寺の庭園。そして、吉祥山無量寿院乗台寺と称し、真言宗智山派京都智積院末である乗台寺の庭園である。

【乗台寺庭園】

乗台寺の寺歴は古く、天慶年間（938～947 年）に開創されたと伝わっている。南北朝時代には佐川郷領主これむねもろのぶ惟宗師信、戦国時代には久武内蔵助親直の菩提寺である。江戸時代には（1603～1868 年）には、深尾家の祈願寺と定められた。

築庭の時期については、深尾家 2 代重昌しげまさの奥方が病気の時、平癒祈願をなして効験があり、全快の御礼として築かれたものと伝えられている。庭園内の樹種の多さ、樹木と樹木が織りなす空間の美しさなど、巧みに自然を取り入れており奥深い。一番の見頃は晩秋である。

昭和 11 年（1936 年）に文部省指定の名勝、昭和 31 年（1956 年）より高知県指定の名勝に移行している。

（３）町指定文化財

建造物 5 件、工芸品 8 件、彫刻 3 件、絵画 1 件、無形民俗文化財 2 件、遺跡 11 件、名勝地 1 件、植物 14 件、動物 1 件、地質鉱物 7 件、計 53 件の町指定文化財が存在する。

【^{さかわぶん こ こしゃ}佐川文庫庫舎（^{きゅうせいざんぶん こ}旧 青山文庫）】

佐川文庫庫舎は高知県に現存する文化財指定建造物では最古の木造洋風建築である。明治 19 年（1886）に須崎警察署佐川分署として、管内関係各村からの寄附金によって新築された。



【開庁当時の佐川分署】

明治 25 年（1892）松方内閣解散による第 2 回衆議院議員総選挙の時、全国的に有名となる斗賀野^の野地騒動^{じそどう}は、この分署から警察官が出動し、国民党と組んで自由党と抗争した。



【移築復元された佐川文庫庫舎】

昭和 5 年（1930）青山会が買い取り、青山文庫の会堂兼特別閲覧室として西町に移築され、県立青山文庫との混同を避けるため「佐川文庫庫舎」と名称を変更し、昭和 52 年（1977）の青山会の解散に伴い、文庫庫舎の建物等は佐川町に寄附された。

昭和 53 年（1978）民具館として佐川町総合文化センター敷地内に再び移築され、更に平成 21 年（2009）須崎警察署佐川分署跡地に移築復元された。

【^{の ちそどう}野地騒動の絵馬】

明治 25 年（1892）2 月、大日本帝国憲法のもと第 2 回衆議院議員総選挙が行われ、その際、政府による苛烈な「選挙大干渉」(*)が行われた。高知県は特に激しく、斗賀野村（現佐川町斗賀野）野地の地で、自由党と国民党（与党）が争い、死者の出る抗争となった。後に



【野地騒動の絵馬】

これを「野地騒動」という。この抗争で、重傷を負った自由党员西田楠吉の傷が平癒したのを祝い、仲間たちが解願奉納した絵馬である。

鉢巻きをしたり、鉄砲を構えたりした緊迫感のあるこの絵馬は、自由民権史上貴重な資料である。

※選挙大干渉とは政府当局者がその権力を利用して、選挙の公正を破って不当に干渉し、反対勢力を抑圧すること。

【サカワサイシン】

町の天然記念物であるサカワサイシンは、佐川町近郷の低山地にのみ植生するウマノスズクサ科カンアオイ属の多年草である。和名は、牧野富太郎が佐川町において国内で最初に発見したことにちなんだもの。地下茎や葉の様子は、他のカンアオイ属とほとんど同じで、4～5月頃、根元に花をつける。がく片は三裂し、ウサギの耳のように尖形をなして長さ3～5センチ、肉質で硬く、内側は濃紫黒色で光沢があり、縁は白色をなしているのが特徴である。



【サカワサイシン】